



学校だより

希望を胸に未来へ前進する学校

校訓
自立
貢献
信頼

学校教育目標

- ・自ら学ぶ生徒
- ・思いやりのある生徒
- ・健康に努める生徒

令和8年10月1日 生徒数 911名



自分にはないものを持っている人と出会うことが成長につながる

校長 金子 二郎

ここ数年とは異なり、先月は残暑という言葉を書き忘れるような日々が続きました。しかし、傘の出番も多く洗濯がはかどらない空模様でもありました。国内では7月から地震や台風も含めた豪雨のニュースが相次ぎ、都市部でも道路冠水等の被害が報道されています。同様な地域での度重なる被害を耳にし、「なぜ、またここで？」と理不尽な自然の猛威の前に為す術もない人の無力さを思い知らされます。



さて、令和8年度も6カ月が経ち、丁度折り返しとなりました。この半年、子供たちは大人が様々な出会いや経験を通して、大人が想像する以上に多くを学んでいることと思います。ネット上の仮想空間ではなく、実際に同じ場所で顔を合わせ、話し合い協力して何かを成し遂げることの大切さに気付くこともできているようです。同時に、自分とは異なる他者との関わりの中で意見の相違から時には対立し、相手の言動に傷つくこともあります。関係を一方的にシャットダウンすることのできない現実社会において、他者と折り合いをつけることの大切を理解できることはとても重要です。作家の橘玲さんは著書「不愉快なことには理由がある」(集英社文庫)で次のように述べています。「ヒトは社会的な動物ですから、チンパンジーなどと同様に、ごく自然に集団をつくり、敵対する集団と競い合いながら仲間意識を高めていくように生得的にプログラミングされています。(中略)集団が成立するためには、「仲間」と「敵」を区別する境界が必要です。この境界は誰かを仲間に入れたり、仲間外れにしたりすることで絶えず確認されます。」一方、社会心理学が専門の大阪大学人間科学研究科の釘原直樹教授は、人が曖昧な状況やフラストレーションに長時間耐えきれず、早急に責任者を選び罰することによって心の安寧を回復しようとする現象をスケープゴートイングと呼び、その例として「いじめ」を挙げています。大人の世界でも、災害や事故で大きな被害が出た時、あるいは不正行為や犯罪が明らかになった時、マスコミによる集中豪雨的な報道がなされることがあり、責任主体が不明確な場合でも特定の人や集団がターゲットとなり非難されることもありました。釘原教授はスケープゴートイングを抑制するために、情報の受け手の能力向上が必要であるとし、批判的思考の大切を説いています。批判的思考の要点として「自分の視点があくまでも一つの視点に過ぎないことに気付くこと」「他者の視点に身を置いてそれを共感的に理解すること」「たとえ自分の考えを否定することになるとしても両者を同じ基準で判断すること」などを指摘しています。さらに自分の知識の限界に気付く「知的謙遜」や自分を疑うという困難なこと敢えてする「知的忍耐」などを加えています。



10月、11月はいじめ防止月間です。いじめは人権侵害であり、決して許される行為ではありません。いじめはどの児童にも起こりうる、どの児童も被害者にも加害者にもなりうるという事実を踏まえ、皆様のご理解とご協力をいただきながらいじめを許さない学校づくりを進めてまいります。私たち大人が率先して子供にとって「あの人のような大人になりたい」という手本になればと心から願っています。

グループを作る場合は、(いろいろな人間を)混ぜないと駄目だ。持ち味ってもんが違うからな (マイルス・デイヴィス)